

2015年4月5日 主日礼拝説教（要旨）

聖書 ルカによる福音書 24章 13～35節

説教 「復活の主と歩む道」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松 牧人

主イエスが復活された日の午後、エルサレムからエマオという村へと向かう二人連れがいました。その一人はクレオパという名の人です。もう一人の名前は書かれていませんが、ひょっとすると二人はエマオに家をもつ夫婦ではなかったかと推測をする人もいます。ともかくこの二人は12弟子ではありませんが、かねてから主イエスを愛し、「あの方こそイスラエルを解放してくださる」と望みをかけていました。彼らは、主イエスが間もなく何か大きな御業をなさるに違いないと期待をかけて、過越祭でにぎわうエルサレムに来ていたのでしょう。ところが、主イエスはあっけなく捕らえられ、十字架にかけられて死んでしまわれました。主イエスに望みをかけていた人たちは皆、深い挫折感に打ちのめされていました。エルサレムの都をあとに故郷の村エマオへ帰ろうとする彼らの顔つきも暗く、その心は重苦しかったのです。

そんな二人のところに、よみがえられた主イエスは一人の旅人の姿で近づいてこられ、一緒に歩きはじめられました。主イエスはすっかり落ち込んでしまっている二人に寄り添って歩んでくださいます。考えてみると、聖書には主イエスに出会った人の話がいろいろとありますが、主イエスはしばしば失意の中にある人の傍らに臨んでくださり話し掛けておられます。シカルの井戸端でサマリア人の女性に声を掛けられたときも、ガリラヤの湖で漁師たちを弟子として召し出されたときも、エリコの町で徴税人ザアカイに声をかけられたときもそうだったのではないのでしょうか。

主イエスは、まず彼らの話している言葉にじっと耳を傾けられます。そして「何のことですか」「どんなことですか」と問いかけながら二人の思いを聞き出していかれます。彼らは「あなたのご存じなかったのですか」と半ばあきれながら、問われるままに自分たちの抱いていた期待と、それがすっかり崩れさったことを話し始めます。この朝、墓が空になっていたことも、女の人たちが聞いたという天使のメッセージも、自分たちには何が何だかよく分からないこととして語っていくのです。

しかし、そこまで聞いておられた主イエスは突然、「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか」（25、26節）と言って、こんどは自分のほうから話を始められました。主イエスはここで聖書を説き明かしていかれます。この主イエスのなさり方は注目すべきものです。復活の主は、もっと手っ取り早く、鮮やかに、ご自分の正体を明かし、「どうだ、よく見ろ」と彼らを驚かせることもできたはずですが。けれども、主イエスはそうはなさいません。もどかしいほどに、時間をかけ忍耐強く聖書の言葉を説いていかれます。その話二人はだんだんと引き込まれていったのです。

エマオの村に到着して、不思議に力強く御言葉を語るこの旅人がなおも先に進んでいられる様子なので、二人はその人を今晚はぜひ一緒にお泊りくださいと引き止めます。それで彼らが一緒に夕べの食卓を囲んだとき、ようやく決定的なことが起こりました。いつしかテーブルマスターとなられた主イエスが、祈ってパンを裂いて渡されたとき、その言葉、その手つき、その振舞いに、彼らはハッとしたのです。このお方こそ復活された主イエスその方であり、主は聖書に書かれていたとおりに苦しみを受けて死なれたが、復活し、勝利して、栄光をお受けになったのだということを悟ったのです。

その瞬間主イエスのお姿は見えなくなるとあります。けれども、彼らはもうがっかりしませんでした。二人は確認しあいます。「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」(32節)。復活された主イエスは悲しみに沈む者たちと一緒に歩いてくださり、聖書を説き明かして下さり、閉ざされていた心を燃やし、信仰の目を開いて下さったのです。彼らの心にひとたび灯された信仰の火は、消えることなく燃え続けました。主イエスの御姿が見えなくなっても、生ける主を見失うことはありませんでした。

信仰の体験は人によってさまざまです。突然、強烈な形で与えられるということもあるかもしれませんが、ここに物語られているのは、静かなものですが確かな御言葉と聖霊の体験です。生ける主イエスが御言葉によって私たちの心を燃やして下さるなら、その火は花火のようにパッと燃えあがってすぐに消え去るものではありません。静かに燃え続けます。そのために主イエスは忍耐強く、私たちに語りかけ、一緒に歩んでくださるのです。

二人は今きた道を引き返しました。このことをエルサレムの仲間たちのところに伝えずにおれなかったのです。日はもうとつぷりと暮れていましたが、二人の顔は輝いていました。仲間たちのいるエルサレムについてみると、何と仲間たちも集まっていて、「本当に主は復活して、シモンに現れた」(34節)と言っていました。復活の主イエスに出会った者たちは立ち上がりずにおれません。一緒に集まります。主が生きて働いておられること、主が教えて下さったことを互いに分かち合わすにおれないのです。そのようにして、復活の主イエスをお迎えし、主を囲む集まりが始まりました。それが日曜日の礼拝であり、教会の交わりです。

主イエスは、しばしば暗い顔をして沈み込んでしまうような私たちに近づき、一緒に歩んでくださいます。主イエスは御言葉によって私たちの心を燃やして下さり、聖餐の食卓によって信仰の目を確かに開いてくださるのです。